

紀 要

第 11 号

目 次

序

- 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き…………… (瀬 口 眞 司)
—地域の検討1. 湖東北部地域—
- 近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き…………… (小 島 孝 修)
—地域の検討2. 湖東南部地域—
- 櫛の造形 —縄文時代の竖櫛—…………… (中 川 正 人)
- 滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描…………… (田井中 洋 介)
- 今津妙見山古墳にみる古墳の築造と葬送手順の一例…………… (横 田 洋 三)
- 古墳時代における琵琶湖およびその周辺地域…………… (細 川 修 平)
- 長浜市石田町所在の石棺について…………… (北 原 治)
- 観音寺山南麓における横穴式石室墳の一例…………… (辻川哲朗・山中 繁)
—蒲生郡安土町石寺所在谷川筋古墳群の調査—
- 蒲生郡の渡来氏族とその文化…………… (大 橋 信 彌)
- 草津市笠山古窯出土遺物の紹介 (続) …………… (畑 中 英 二)
—窯詰めの方法の復元について—
- 森瓦窯再考 —「田原道をめぐる二つの地域」補遺—…………… (重 岡 卓)
- 近江式装飾文よりみた小形板碑の年代…………… (兼 康 保 明)

1 9 9 8 . 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

今津妙見山古墳にみる古墳の築造と葬送手順の一例

横 田 洋 三

はじめに

滋賀県高島郡今津町福岡に存在する妙見山古墳群は湖北バイパスの建設、民間造成などに伴いそのいくつかが発掘調査されている。このうち、昭和60年に滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会⁽¹⁾によってE-1号墳が調査されている。この古墳は直径10.5m、高さ1.5mを測る円墳で、主体部は小口部分を石積した木管直葬である。築造時期は6世紀中期後葉の時期が与えられている。調査時点では未盗掘であり墳形もまた築造時の形状をよくとどめるものである。

古墳周辺の地層は上層が黒ボク層、下層が黄褐色粘質土層である。この地層は両者明確な色調の違いを見せており、この違いを利用して古墳を観察し、築造と葬送手順をリアルタイムで追ってみたい。

工程1 周溝の掘削

工程1の築造部は墳丘外周部に確認される土盛部分である。土層として1～3の3層が盛土部分で、第4層の黄褐色粘質土層が地山である。第3層の黒褐色粘質土は基本的には地山であるが、この層の下端面が周辺の地形と同じ緩い傾斜を示しているのに対して上端面は水平面をなし、周辺地表面より高くなっている。よって、この層の上層部は盛土されていることになる。当然この層内はいくつかに分層され盛土がなされている所が見い出されるはずであるが、黒ボク内での土の移動であるため、観察は難しい状態である。

第2層は薄い黄褐色粘質土である。この土は自然堆積では黒ボク下層に存在した地層である。このため、この土は周溝下層を掘削した時の土を盛り上げたものとして理解できる。周溝は黒ボク層から掘削されているため、さきの黒ボクの第3層は周溝の掘削土であり、ここまでの墳丘盛土は周溝の掘削土によって築造されたものと理解できる。

周溝部分の容積は約23m³。墳丘は黄褐色粘質土層

までの高さ30cmで土量が約23m³となりほぼ同量である。よって、周溝掘削の土はここまでですべて使用され、高さ30cmの上面の平坦な墳丘が築かれたことになる。

ここで築かれた墳丘は平面形が正円をなし、周溝も180cmのほぼ一定した幅で掘られている。上面を水平な平坦面としていることと合わせて、幾何学の知識を持った測量を伴って築かれたものである。横穴式石室を採用する小古墳では石室に引張られる形でその墳丘の形状を乱すものが多いが、当古墳はこの時点では主体部の施設が無いこともあり、周溝の掘削、墳丘形状の成型に主眼が置かれ、整った墳形を作り出している。

工程2 仮墳丘の築造

黄褐色粘質土層の上面は再び黒ボク層となっているが、この土は上記の理解から搬入土である。搬入された土量は25m³となる。これで、墳丘築造に必要な土量の全量であるため、築造に要した土の搬入はそれほど多いものではなかったと理解できる。

ここで一旦、墳丘が出来上がったことになる。この段階で一旦作業は中断されている。当然、まだ主体部は設けられていないため、これは被葬者自身が生前におこなった工程として理解できるものである。

工程3 主体部の掘削

主体部を設置する工程である。よって、これより葬送本番の工程となる。

主体部は墳頂部の中央から掘削して設置している。上部は直径6mのやや方形に振った形状の土坑で断面はレンズ状、下部は2.5m×4.5m深さ70cmの方形の土坑と2段掘りとなっている。これらの掘削土量は23m³であり、ほぼ墳丘土量の半分に及ぶ。よって、木棺の設置のためにそれまでに築いてあった墳丘の土量の半分を取り崩したことになる。

主体部の設置位置は墳丘のセンターから外れてい

る。主体部を墳丘中央部に正確に納めるには、墳丘のセンターを示すものを設置しておく必要があるが、当古墳ではこのような作業は行われていないことになる。主軸方向もほぼ東西方向となっているが、何らかの測量結果を反映した方向とは言えない。このように主体部の設置には幾何学的な技術を見ることができず、墳丘の成型と主体部の設置とは技術的な観点から見るとかなりの相違があることを指摘できる。

工程4 木棺の設置

主体部は長さ4.0m、幅0.85m、高さ70cmの木棺直葬である。この木棺の両小口は石材を骨材として積み上げ、隙間を粘土で塞いだものである。小口に積まれた石材によって木棺が組み立てられているため、古墳内に設置されたことにより初めて木棺として形作られ、単体では木棺として成り立つものではない。このことから、被葬者は棺に納められて被葬地に運ばれたものではなく、現地にて棺に納められたものであることがわかる。

当古墳は木棺直葬の主体部であるため、設置後は棺外に空間を持たない。木棺直葬の主体部の設置は竪穴式石室と共通した要素を多く持つが、竪穴式石室が木棺を設置してから石室の石材を積み上げ棺外に恒久的な空間を作り出し、棺外の空間が供献の重要な場となっているのに対して、木棺直葬では棺外にまったく空間を持たないことに留意しておきたい。

工程5 封土前の葬送儀礼

棺の上端面と同じレベルの棺外で須恵器の杯身・杯蓋・壺が出土している。いずれも完品もしくはそれに近いものであり、埋葬時に添えられたものと判断できる。

棺に被葬者が安置された段階で、すでに棺の外側は上端面まで埋められていることを示すものである。さらにこの時点において、重要な葬送儀礼が行われたと判断できるものである。

この葬送儀礼は、外部から見て、墳頂部がレンズ状に大きく掘り窪められ、さらに棺を中心とした長さ4.3m・幅2.0mの方形の平坦面が10cmほどの段差をなしている状態で行われた。また、木棺内部には

上部から転落したと考えられる遺物が存在しないため、この時点では棺の蓋は開いていたものと思われる。

棺外の平坦面で検出された須恵器の杯身はいずれも口縁部を上に向け、また壺は杯蓋をふたにしており、内部に供物を入れていたことを示している。埋葬後、空間として残るのは棺内のみである。ところが、ここでは埋葬後、結果として空間として残らない棺外に一時的に平坦面を設け、副葬品を添える場として扱っていることになる。棺外の幅60cmほどの平坦面はこの葬送の儀の重要な場の一つとして見るべきであり、検出された土器以外にも多くの供物が添えられたものと考えられる。

この最も盛大と考えられる儀式が行われている時、この古墳は墳丘上部が大きく開けられ、この掘られた土が墳丘の外側に仮積されているという状況が浮かび上がる。この状況は竪穴式石室の葬送状況に近いものともいえる。ただ墳丘が小形であるため中央掘削部の占める容量が大きく元の墳形を想像しにくいような光景である。横穴式石室を主体部とした古墳で行われた葬送の儀と比べるとやはりかなり異質な光景と言えよう。

工程6 封土

木棺を埋め、墳丘を整形して一応の送葬の儀が終了したものと考えられる。この時、用いられた土は先に掘られた墳丘掘削土であるが、木棺を設置する掘形が地山の黄褐色粘土層を大きく切り込んでいるため、ここでの封土は黒ボクと黄褐色粘質土の混合層や互層となっている。

墳丘上の装飾は発掘調査では何ら見い出せていないので、ここでは言及することはできない。

まとめ

以上、後期古墳の築造工程の一例を、順を追って見てみた。墳丘盛土の約半量は周溝の掘削土でまかなっており、残り半量が搬入されたものとなっている。墳丘の最終形状での盛土土量は48 m^3 であるが、ここまでに移動した土の総量は94 m^3 である。1人当たり1日の作業土量を1 m^3 した場合、この古墳は94人日の作業を要する古墳となる。

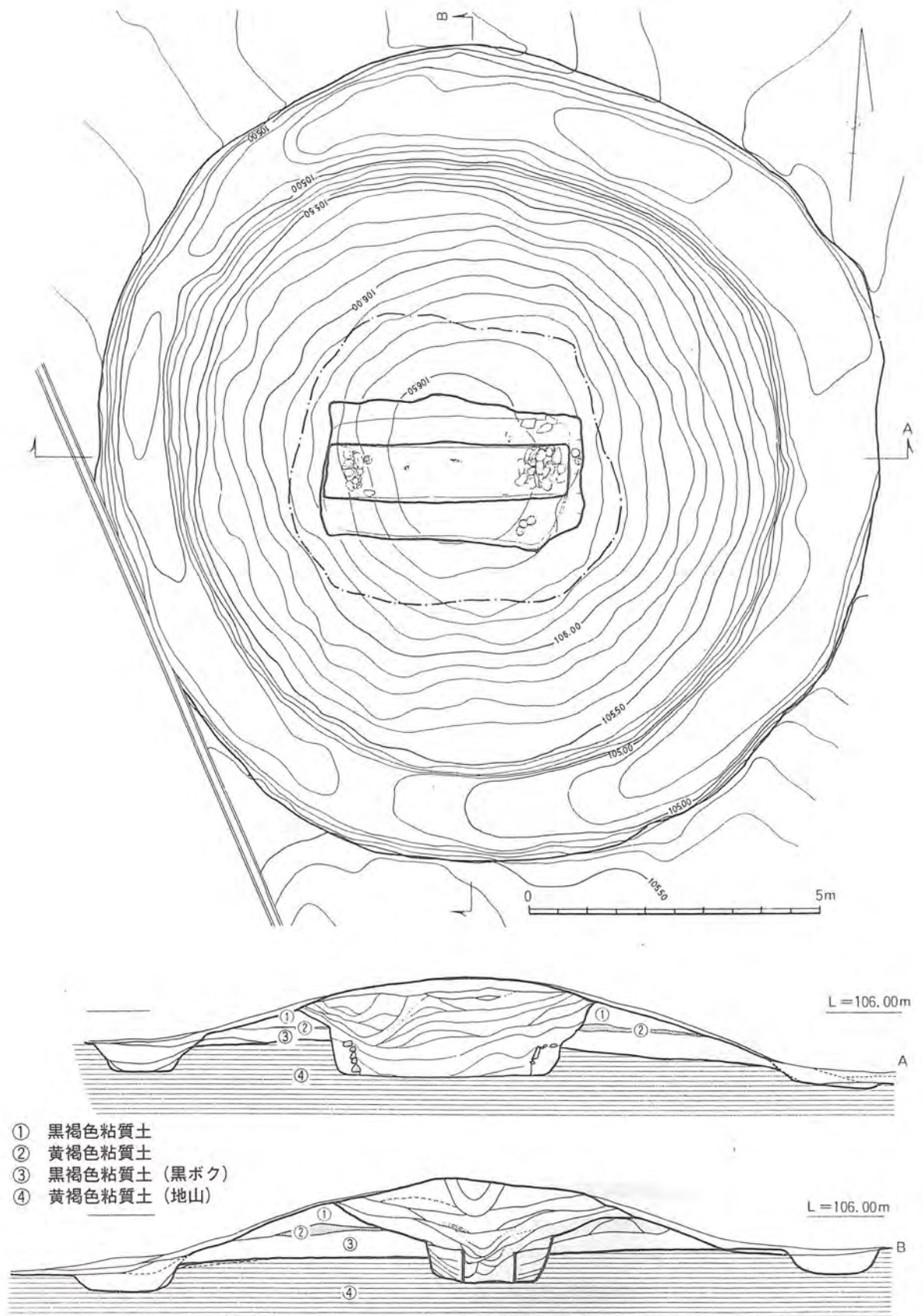
葬送手順では棺外の供献遺物が注目され、供献の場としての平面を棺外に作り出している工程を見てとれる。この場はあくまでも一時的な面であり、以後空間として残るものではない。このような一時的な平面を供献の場として設けている儀礼は古墳における葬送意識を考える上で重要なものであろう。同時期、対極的な主体部構造である横穴式石室を採用する古墳とはその構造的な違い以上に、そこでとりおこなわれた葬送の儀に大きな違いを見ることができ、また、その意識にも恒久的な空間の意識の強い横穴式石室に対し、空間意識のまったく無い供献もおこなう木棺直葬の葬送のあり方に触れることができる。

註

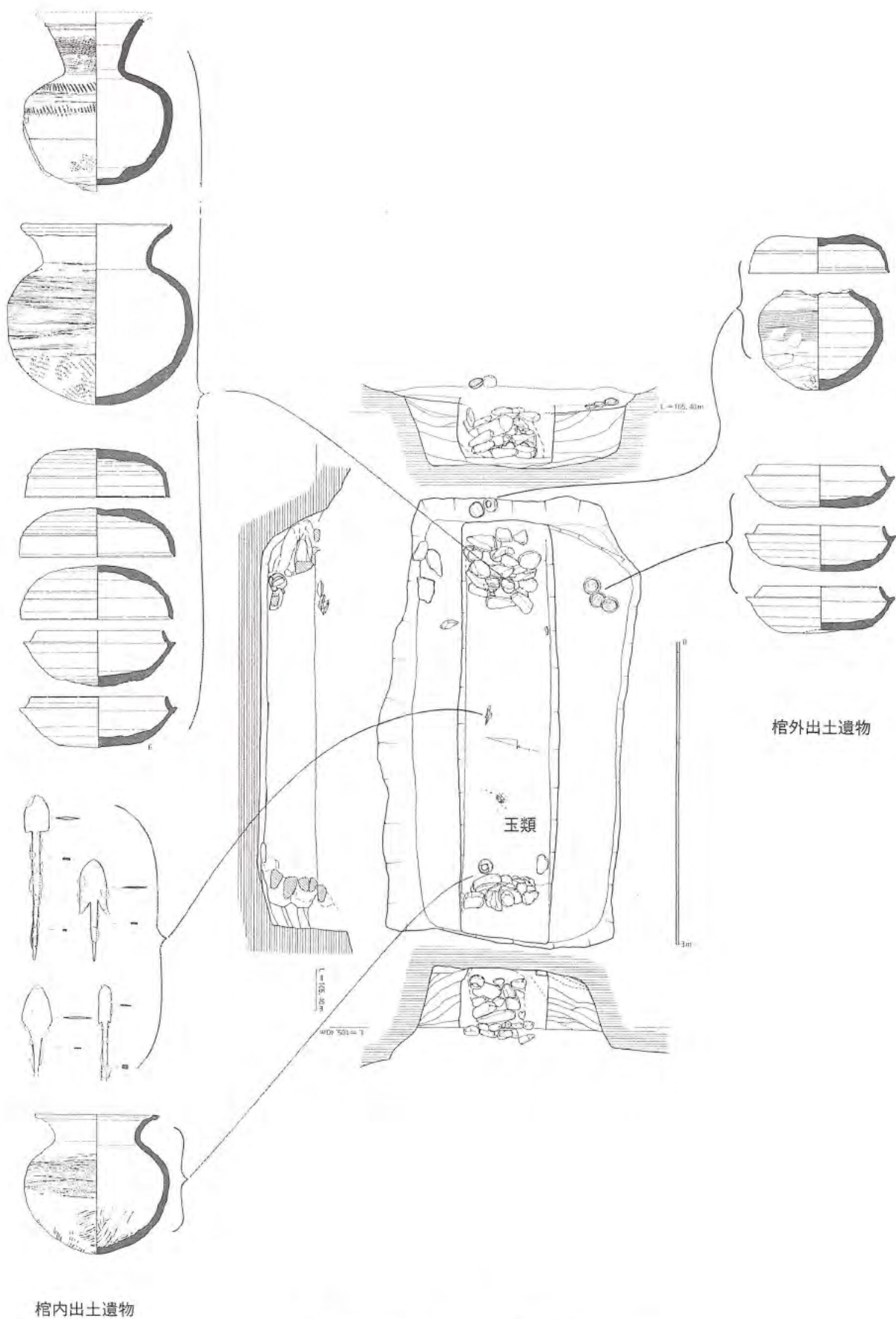
- (1) 妙見山遺跡(妙見山古墳群)「一般国道161号(湖北バイパス)工事関連今津町内埋蔵文化財発掘調査報告書」平成2年3月 滋賀県教育委員会(財)滋賀県文化財保護協会



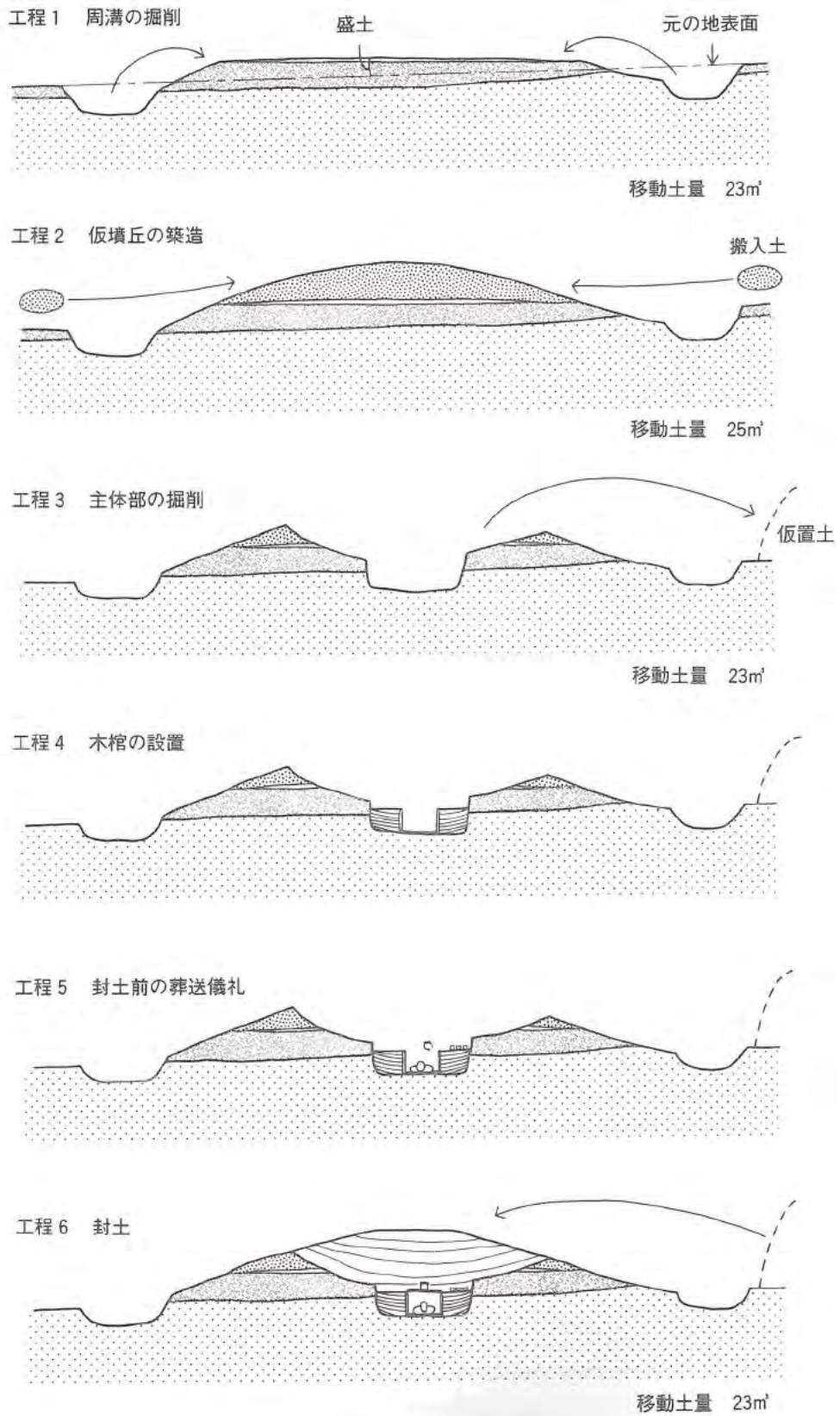
工程5の状態の妙見山E-1号墳



第1図 今津町妙見山古墳 E-1号墳平面・断面図



第2図 E-1号墳 遺物出土状況



全体移動土量 94m³
 作業量 94人日 (1人の作業量を1m³/日として)

第3図 古墳構築の工程

編集後記

『紀要』第11号を発行することができました。紀要の創刊は、昭和63年3月なので本号でちょうど10年を迎えることとなります。初心を忘れることなく続けていきたいと思っております。

前号より、本文は2段組となり量的に若干の余裕ができ、本号には各時代にわたって12本の論考を掲載することができました。つきましては、多くの方々からご叱正とご指導を賜れば幸いです。 (K. O)

平成10年3月

紀要第11号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(077)548-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel(077)523-2580 Fax(077)524-6668

8923

K

滋賀県文化財
保護協会蔵書印

440